

「<sup>クレド</sup>信仰宣言」

のカテケーシス

(VI)

「罪のゆるし、

からだの復活、

永遠のいのちを信じる」

竹山昭

わたしたちが取り上げてきた「信仰宣言」は、その最後の部分で、わたしたちが受け、来たるべき将来に実現する恵みと希望の現実を宣言して閉じる形になっている。それは、いつそう複雑な形に発展した他の信仰宣言定式でもほぼ同様である。多少図式的になることを承知の上で言うなら、教会を通して、教会において、父と子と聖霊を信じるわたしたちが、自らの現在と未来を父と子と聖霊からどのようなものとして受け取るのかを告白しているのだと言うことができよう。すなわち、「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます」。

一、罪のゆるしを信じます

「罪のゆるしを信じる」というような表現を耳にすると、あるいは、罪が何か自分とは別の、それ自体で存在するもののように誤解する人もあろう。たしかに罪とは理解しがたいものである。罪がしばしば「闇」のイメージで表されたりするのも、罪の愚かさやみにくさをさしていることばかりではない。その不可解さ、理解しがたさをもさしているからに他ならない。罪とは、本質的に矛盾に満ちたものである。

しかし、罪は本来、罪人と別の独立した現実ではない。